

祭車 30年以上前の姿復活へ

四日市の北村石取祭



1987(昭和62)年8月の祭りで町練りする旧祭車＝四日市市富田で(横山さん提供)

祭りは一九一五(大正四)年、当時の住民が手づくりの祭車で「曳き廻し」を始めたのが由来とされる。その後、二一(同十一年)に桑名市赤須賀地区から祭車を購入。以来、太鼓や鉦を打ち鳴らしながらの町練りが、夏の風物詩として地元住民に親しまれてきた。

ただ、祭車の老朽化が進み、八八(昭和六十三)年を最後に休祭に。桑名市内の宮大工らの手で解体修復されたもの、資金不足のため漆塗りまでできず。未 completionのまま、コロナ禍前の一昨年まで町練りが行われていた。

修復では、旧祭車と同じく「螺鈿仕上げ」と呼ばれる技法が使われる。アフビなどの貝殻の裏側をはがし、細かく砕いたものを漆面に貼り付け、きらびやかな見た目に仕上げる。同社の職人四人を中心に、解体から復元までの工程を手掛ける。その一人、伊藤俊克社長は「祭車は祭りのシンボル。地元の人たちが自慢できるような仕上がりを目指したい」と意気込む。

来年七月に完成予定で、翌八月の町練りでお披露目される予定だ。祭車の修復を担当する、北村石取祭車

白木に漆塗り当時のデザイン再現 来年7月完成 8月の町練りでお披露目

四日市市の北村町自治会(現南富田町と茂福の一部)で100年ほど続く「北村石取祭」の祭車が、30年以上前と同じ姿での復活に向けて動きだした。25年前、祭車が復元されたものの白木のままの状態だったが、職人らが漆塗りをし、当時のデザインが再現されることになった。(尾林太郎)



漆塗りを施した祭車の完成イメージ＝マルスエ佛壇提供



漆塗りによる修復が決まった白木の現祭車＝四日市市南富田町の北村鎮守若宮八幡神社で(横山さん提供)

復元委員会の横山利美会長(左)は、「新しい祭車で祭りが盛り上がり、北村町地元の誇りを、未来の子どもに引き継いでいきたい」と期待を膨らませる。

北勢版 16

